

コンピュータ・ブレイク

淡波亮作

「だっさー」

ヴィナはつい本音を口にした。生暖かく湿っぽい空気、ごみごみした街、鈍臭いの
過剰なファッションを見てみると、不快感が更に強まる。

「ここどこ、いつなの？」

《二〇一九年、トーキョーです》

「まじ、ここがトーキョーって？」

《はい。シブヤ・ビットバレー。ITの集積地区であり、若者のエネルギーが満ち溢れ
る街です》

「はあ。で、なんでそんな半端な時代なの」

《あなたの望んだ時代かと。平成三十一年、人類の行く末がまだはつきりと見えなかつ
た最後の時代とも言われていますから》

「ああ、そうか。へーせーって、聞いたことある。で、こいつらみんな、ジャポネなん
だ」

《比較的多人種がいるようですが、現在視界に入っている人間の八七％はジャポネーぜ、
です》

「そ」

大まかな状況を把握すると、ヴィナは耳の後ろに軽く意識を向ける。スイッチが切れ、局との通信が途絶えた。

「で、どうすんだっけ」

ヴィナは周囲を見回す。アースカラーでまとめ、いかにも自然派だという感じの少女が眼につく。ヴィナは駆け寄り、親しげに声を掛けた。

「よ、どう？」

「え？ なんですか」

少女が不安げな顔を向ける。

「きみ、地球とか自然とか好きでしょ？ もしき、地球が三〇年後に滅びるかもって聞いたらどうする？」

「キモ！」

少女はそう言い捨てて逃げた。ヴィナは頬を膨らませる。

「あれ……ジャポン語ちゃんと喋れてなかったかな」

《大丈夫、完璧ですよ》

つい、局に話しかけるような口調で言うと、すぐに返事が届いた。

「つておい！ 通信切ってたのになんで聞いてんのよ」

《あなたの監視は切れませんよ。切れたのはこちらからの通信だけですから》

「なーんだ、意味ないじゃん」

《続けますか？》

「そりゃ、続けるって」

そう言い終わるか言い終わらないかのうちにヴィナは次のターゲットを捉まえた。やはり渋谷の街にはいまひとつ不似合いに見える山男風の若者だ。ヴィナに声を掛けられた若者は警戒の表情を浮かべるが、矢継ぎ早に喋るヴィナに悪意がないことを見て取ったのか、喜んで話し相手になってくれた。

「——そうだな。僕ならまず世界中のコンピューターを止めるね。スマホもいらぬ。ITこそが諸悪の根源だし、僕ら、本当は自然さえあれば生きていけるんだ。ね、君もそう思うだろ。だからそうやって聞いてくるんだよね？」

「いや、そうじゃなくてさ——もつとこう、前向きなアイデアはないのかな、人類の未来を拓く進歩的で前向きなさ」

「違う違う、分かってないな。科学技術の進歩こそが、人類を袋小路に追い込んでるんだから、僕らは自然に帰るのがベストなんだ。山はいいぞ、人間がいかにかちつぽけな存在かって心の底から感じさせてくれるからね」

「あー、分かった。もういいや。あんたはお呼びじゃない。次行く」

おいと振り返ると、ヴィナはすたすたと歩き出した。

「おい、君！ 僕と付き合いたいんじゃないの？」

ヴィナはまるで聞く耳を持たない。

続いて数人の男女と話をしたヴィナは、もう降参、というように両手を上げた。

「ね、もういいや。この時代に救いはない。もつと別の時代に行こ」

ヴィナの姿はあれよという間に透き通り、消えてなくなった。驚くべきことであっただろうが、この街で他人の様子を気にしている者などいない。話をした男女も、山男も、もうヴィナのことは微塵も覚えていないだろう。

(続きは電子書籍で！)